

氏 名 葉 暁瑤

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2292 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 京都の場から読む川端康成文学——戦中期・戦後期を中心  
に

論文審査委員 主 査 山田 奨治  
国際日本研究専攻 教授  
劉 建輝  
国際日本研究専攻 教授  
坪井 秀人  
国際日本研究専攻 教授  
石川 巧  
立教大学 文学部 教授  
斎藤 理生  
大阪大学 文学研究科 教授

(様式3)

## 博士論文の要旨

氏 名 葉 暁瑤

論文題目 京都の場から読む川端康成文学——戦中期・戦後期を中心に

文学作品から代表的な都市表象を掘り起こすことは、過去の記憶を想起し、それらの記憶に刻まれた時代に対して迎合したり、あるいは対抗したりする力を解明することにつながる。特に、川端康成の文学を同時代の文脈のなかで検討するにあたり、「過去の日本」の代表とされてきた京都についての描写は重要な位置を占めている。

三部八章からなる本論文は、こうした問題意識に基づき、京都に光をあてながら川端の作品を読み返し、そこに描かれた京都像（以下、〈京都〉と表記）を検討することを通して、京都を舞台にした作品において体现されている川端像を浮き彫りにするものである。以下、八つの小説を中心に分析した各章の概要を述べる。

第Ⅰ部は川端とかかわりのある満洲を「むこう」の場所として導入することによって、京都を相対的に考察するものである。戦時中の川端作品における京都は、西欧的な生活規範を模倣する東京と対になり、優れた文化を生産した「故国」としてのイメージを背負っていることを明らかにした。

第一章では、戦時中の川端作品における京都の位置を確かめるための補助線として、「美しい旅」を取り上げた。山の奥、東京、満洲に注目することによって「美しい旅」に織り込まれた同時代の思考様式や文化的価値のパラダイムを浮き彫りにしようと試みた。作品の後半において、主人公の一人の渡満にともないドキュメンタルな要素が盛りこまれてくることにも留意した。結果的には、東京が「東洋にとっての西洋」としての日本を彷彿とさせる一方で、満洲はそうした「西洋」の俯瞰的な視線を受けながら、山の奥と地続きの関係性を結んでおり、日本国土の拡大を象徴するという構図が読み取れた。

第二章では、戦時中の『満州日日新聞』に連載された「東海道」という作品に目を向けた。「東海道」に先立ち発表された一連の作品における「故郷」の表象を参照枠として、「東海道」で繰り返し取り上げられた古典作品の生産地である京都とそれらの「故郷」との関係を検討した。満洲旅行から戻った後に描かれた「東海道」という作品の方向性は、前の作品にあらわれた故郷を探す行為と異なり、むしろ故国称揚に転じていくことが確認できる。このように、「東海道」に着目することによって、京都が当時の「外地」とされた満洲との関係において、日本という故国を代表する地位を獲得するようになった経緯を浮上させることができた。

第Ⅱ部では、一九五〇年代前半までの作品を扱い、京都が特殊な場所として作品に織り込まれていることを明らかにした。川端はこの時期の〈京都〉を表象することで、同時代の政治や社会動向に目を向けつつも、そこから目をそらす姿勢を表明している。

第三章では、京都を主要な舞台の一つにした川端の最初の長編と称される『虹いくたび』を取り上げた。特攻隊員が戦死する前に死を自覚し、死を自ら演ずるところに特攻作戦の特徴があることに注目し、死者の創出した「自己物語」と生者の理解との乖離が、生者に心の傷を負わせたことを明らかにした。一方で、桂離宮にまつわる言説を通して、戦争を生き抜いた生者の目に映っている桂離宮は戦死者が生きていた時代の桂離宮とそれほど変わっていないことに注目し、桂離宮という場が実は死者と共通する時空として造型されていることを指摘した。

第四章では、『日も月も』の光悦会をめぐって、毎年同じ日に茶会が開かれるその場所の作中における機能を明らかにした。初回の光悦会と同じ日に起きた京大天皇事件は作中人物に息子の戦死を想起させ、皇居を巡る行為は皇居周辺における過去と現在の交錯を示している。また、混在郷<sup>ミゼンキョウ</sup>という概念を光悦会と結びつけ、光悦会は「新生日本」のなかの一つの異質な空間であり、支配的な社会秩序に異議を申し立て得る機能を果たしていることを明らかにした。

第五章では、川端作品において東京が集中的に描出された最後の作品である『東京の人』に着目し、特に日比谷と浅草を検討した。まず、作中人物が別れを告げた場所としての日比谷交差点に焦点を当て、占領軍に主導された東京都心における権力関係の温存が示されていることを指摘した。「新しい日本」と「古い日本」の両極を象徴した司令部と皇居との対立の構図は、人々の東京を離れようとする契機になったことが窺える。また、浅草にたどり着いた家出人が自由を浅草で追求するものの、浅草はすでに東京都心と同じく離れようとする場所となっていることを明らかにした。

第Ⅲ部では、高度経済成長期のまっただなかで発表された三つの作品を取り上げる。第Ⅰ部と第Ⅱ部で扱った作品には社会的なコンテクストとの交通が大きくかかわっているのに対して、第Ⅲ部では個人回帰の傾向が顕著にみられる。

第六章では『古都』を、従来重視されてこなかった苗子の視点に沿って考察した。まず、作中において市内と北山杉の村とのあいだに境界線が引かれていることを指摘した。そして、北山杉の村の景色が、幼い川端になじみのあった景色と近いことを論じた。続いて、苗子が千重子とドッペルゲンガーである可能性を提示した。そうした可能性を検証するため、今度は千重子の視点に切り替え、千重子の目に映る京都が世界という視座のなかに位置づけられることを示した。また当時の川端が、国際的な舞台で活躍するようになってい



たことを踏まえ、千重子が川端を象徴する人物として作り上げられていると捉えた。一方で、幼い川端が苗子に投影されていることにも注目した。

第七章では、『美しさと哀しみと』に目を向け、作中人物のけい子は音子の死児の亡霊に憑かれていると同時に、主体性が残っていることを浮き彫りにした。また、けい子の身体が右と左に分けられ、それぞれが亡霊の宿る側と主体を代表する側として造型されていることを明らかにした。作品に繰り返し登場した特別な場所に対する分析をとおして、けい子の身体自体が京都の表象となり、右側と左側もそれぞれが右京と左京に対応している可能性を提示した。

第八章では、長編の『たまゆら』を取り上げた。観光におけるゲストの立場に満足せず、ホストの立場を求め続けている「旅人」のスタンスが確認でき、ゲストからホストへの移行が世代継承の象徴的な出来事として位置づけられ、作品自体が旅を通して世代継承を語った物語であることが明らかになった。

以上の議論を通じて明らかとなったのは、第二次世界大戦を生き抜いた「平和」な都市であり、また千年の都でもある京都は、川端の作品において、故国の精神を象徴する場所、変わらない場所、首都東京と違う場所、そして、一つの京都でも異なる側面を持っている場所として、膨張・収縮し、固定的でなく流動的な「場」として登場していることである。裏返していえば、川端はひたすら平和な都市や「古都」としての〈京都〉に注目しているわけではない。むしろ〈京都〉のかたちを変えるか、あるいは異なる側面に光をあてるかによって、作品に登場したほかの場所と連動させながら、社会における錯綜した権力関係のなかに自分の立場を確保していったと結論づけられる。

## 博士論文審査結果

Name in Full

氏 名 葉 暁瑤

Title

論文題目 京都の場から読む川端康成文学——戦中期・戦後期を中心に

川端康成については、生前から川端康成研究会（のち学会に改称）という個人作家研究会があり、以後 50 年以上に亘って持続的な研究がなされてきた。したがって、個人作家研究としては異例なほどの蓄積を重ねている。このことは 1968 年に日本人として最初にノーベル文学賞を受賞したことも含めて作家への評価の高さとその作品の豊饒に由来するのだが、同時にそれは新たな作品読解を提示し川端研究を文学研究や人文学研究の広範で多様なネットワークに接続することを困難にさせてきた一面もある。京都を中心とする都市空間の表象とその変遷から作品史を再編成する本論文は、作家個人の資質や経験をもとに作品読解を行う作家論の限界を超克し、川端文学と作家像を同時代の状況に対して文脈化（contextualize）することを目指している。その意味でも本論文は上記のような研究状況の閉塞性を乗り越えようとする野心的な試みである。

著者がこの問題意識にもとづいて用いているのはかつて前田愛が『都市空間のなかの文学』で開示した都市空間論の方法であり、くわえてそれを更新すべく、デヴィッド・ハーヴェイによる批判的地理学の最新の理論なども導入されている。論文の序章では、膨大な先行研究を整理しながら、こうした理論的前提について論究されており、論文の隅々に著者が配置する理論的論述を統括する重要な導入部としての役割を果たしている。

本論文は計八章、三部構成から成る。第Ⅰ部は戦時期に川端が関心をもち、小説にも描いた満洲を〈むこう側〉の空間として位置づけ、満洲の視点から作品における京都像を相対化することを企図したものである。少女小説として発表された『美しい旅』を取り上げた第一章では、地方の山国と東京、満洲との間の空間移動に着目し、地方化されていく満洲の外地の様相を批判的に論じている。また、第二章では『満洲日日新聞』に連載され、これまでほとんど研究されてこなかった『東海道』を扱い、川端における一連の故郷表象と満洲表象に京都がどのように関連づけられているかを丁寧に論じている。

第Ⅱ部では 1950 年代前半期の京都を描いた作品群が論じられ、敗戦期から占領期にかけての京都が置かれた特異な歴史性に着目するとともに、川端が同時代の政治性に対する視線を回避していることを批判的に論及している。京都を主要舞台とする最初の長篇作品『虹いくたび』を論じた第三章では、敗戦直後の川端の作品をも参照しながら、特攻作戦の経験が残した死者の物語と残された生者の戦後の時間との関わりを戦時と戦後の間を連続する桂離宮の描写から考察している。『日も月も』を取り上げた第四章では、年中行事である茶会の光悦会の場所性に着目し、同時期の京大天皇事件や皇居周辺の描写に過去の記憶の痕跡を見出し、戦後日本の出発にまつわる光と影の両面を的確にとらえている。一方、東京の空間を描いた川端最後の作品である『東京の人』を論じた第五章では、日比谷と浅草という二つの空間に焦点をあて、占領軍司令部と皇居とが対をなす物語の枠組みを指摘して、占領期の東京をまなざす川端の独自の姿勢を浮かび上がらせることに成功している。

第Ⅲ部では、戦時期と戦後の時間を往還する先行する二つのセクションとは異なり、高度経済成長期の京都や地方を描いた 1960 年代の作品を取り上げ、伝統と現代性の中でゆれうごくこれらの場所の多様な姿に光をあてる。京都を描いた最も代表的な川端の作品である『古都』を論じた第六章では、先行研究では看過されがちであった作中人物・苗子の形象から読解を行うことで、京都の洛中と北山の村との間に設けられた境界性について考察を行い、その差異に作者川端自身の過去と現在が投影されるという二面性があることを指摘している。さらには、苗子と千重子の関係は一種の分身（ドッペルゲンガー）の関係にあるととらえる大胆な視点も提示している。第七章では『美しさと哀しみと』を取り上げ、作中人物のけい子が師匠で恋愛相手の音子が亡くした死児の亡霊に憑かれていると論じ、その人物像の主体性について考察するとともに、その身体性に京都の空間が重ね合わされているという説を提示している。最後の第八章では『たまゆら』を取り上げ、観光人類学の知見に学びながら、旅を仲立ちとする世代継承の物語に対して〈ゲストのホスト化〉という新しい視点から再解釈を行っている。

本論文は以上のように、京都を中心とする都市の表象という共通の視座から川端文学の系譜を新しく組み直した点で、作家論や個別作品論に限定されてきた従来の川端研究とは一線を画する研究である。川端康成は 18 歳で上京してからは東京に住み、30 代半ばからは鎌倉に住まいを定めたが、戦後、特に晩年にはしばしば京都を訪ねて滞在し、とりわけ国際的には日本の伝統美との関わりで評価されたこともあり、京都という場所との関わりは彼の文学全体を考える上できわめて重要である。本論文が京都の空間性をもとに川端の文学の展開に一つの筋道を付けたことはその点でも大きな功績である。

国際文化観光都市としての性格を掲げるようになる戦後の京都は、伝統性と国際性という両面性を担うことになるが、それは同時に関西に出自を持ちながらモダニズムの時代をくぐり抜けた川端の作品の複雑な性格に重なる。両者のそうした相似的関係に焦点をあてているところも本論文の貢献であろう。また『古都』や『美しさと哀しみと』などを除き、これまで比較的論じられることの少なかった川端の作品に光をあててその再評価を促していることも貴重である。さらに『少女の友』『小説新潮』などの発表媒体への注目やテクストの分析の細部においても従来の川端像を塗り替えようという意欲に満ちている。

本論文は、序章にも明らかなように各所において文学理論や歴史社会学その他の隣接分野の理論の導入に旺盛で、それは京都その他の都市空間と作中人物の身体空間とを類比的にとらえる大胆で野心的な読解に導いている。自説を補強するために人文科学の理論や知見を幅広く援用している。ただし、京都に関する地誌的な考察がやや不足しているところは惜しまれる。また、説得力のある理論を構築するためには、もう少しテクストの本文を丁寧に読解する必要があったのではないかという指摘もなされた。

しかしながらこれらの欠点は今後の研究の進展によって補うことは十分に可能であり、本論文の価値が損なわれるものではない。何よりも一貫した論理的骨格をもった、新しい川端康成研究を完成させたことは高い評価に値する。本論文が今後の新しい川端研究を促す契機となることを期待したい。

以上、総合的に検討した結果、本論文を学位授与にふさわしいものと、審査委員全員一致で判定した。